

こんな時代にロシア語のすすめ 第 10 回

「マフィアと戦う図書館員」

黒田 龍之助

少し前のことですが、夏休みに東京・上野の国立西洋美術館で開催された中世ヨーロッパの写本展を見てきました。13 世紀から 16 世紀の西ヨーロッパで制作され、羊や子牛など動物の皮を加工して作った紙には、聖書の文言とともに美しい挿絵が描かれています。ほとんどがラテン語なのですが、わたしのラテン語の知識ではとても解読できず、かといって少しだけあったドイツ語だってスラスラ分かるわけではありません。せめて聖書のどの部分なのか、説明があればなあと思いつつ眺めていました。

今でこそロシア語とか言語学とか、あれこれ広くやっておりますが、大学院時代の専門は中世ロシア語でした。修士論文は 12 世紀に書かれた聖者伝の文法分析で、論文執筆中はロシアの古文と睨めっこする毎日。といっても古文書そのものではなくて、専門家がすでに分かち書きした校訂テキストなんですけど、それでも十分に難しかったです。同時にとても楽しかったです。

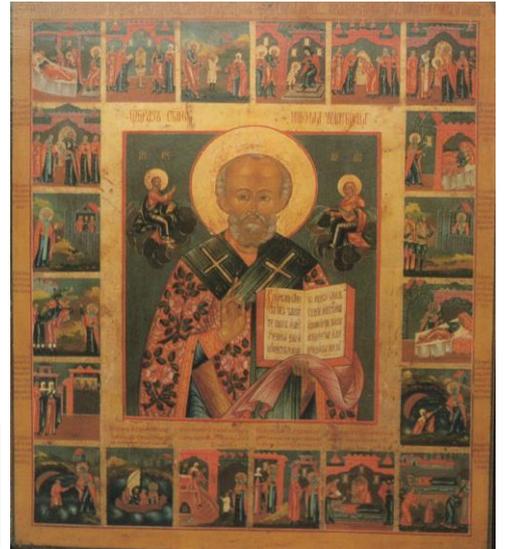
古い時代のロシア語写本が好きです。言語が専門ですから、注目するのはテキスト部分ですが、そこに美しい挿絵や飾り文字が描かれていたりしますと、ウツリ眺めてしまいます。そういうときはやっぱりカラーがいいですね。今ではあらゆる図版でカラーが当たり前ですが、ソビエト時代の本は白黒写真が多くて、いつも残念に思っていました。

それでも礼拝に用いられる聖像画、すなわちイコン画を紹介する本はさすがにフルカラー印刷で、本当に美しい。その分、お値段も高い。そこで JIC から派遣されてソビエトに行くときは、自由時間にせつせと書店を回り、日本では高くて買えないイコン画集を買ったりしていました。

イコン画は真面目な宗教画ですから、面白おかしいというわけにはいきませんが、そこにも楽しさがあります。たとえば聖者伝イコン画 *Житийная икона* は、聖像画の周囲にその聖者の生涯を描いた小さなイコン画がいくつも配されており、まるでコマ割り漫画のようです。ときにはカルトウーシュという装飾枠の中に銘文が書かれていることもあって、これは吹き出しみたい。そこ書かれた中世ロシア語を読もうと懸命に目を凝らすのですが、かつては知識が足りず、最近では目が弱って、どうにも太刀打ちできません。それでも美術館では、相変わらず懸命に目を凝らしています。

美しい絵画は好きですが、専門はなんといつても言語ですから、一番好きなのはやはり本ということになります。

聖伝者イコン画
はまるでコマ割
り漫画



だいぶ以前のことですが、キエフでウクライナ書籍印刷物博物館 *Музей книги і друкарства України* をカミさんと訪れたことがありました。ここには『過ぎし歳月の物語』という年代記の最古の写本（原本は現存しない）が展示されています。この物語の作者は修道僧ネストールというのですが、彼は年代記以外にも『フェオドーシイ伝』とか『ボリスとグレープの殉教講話』といった聖者伝を書いており、前者はカミさんの、後者はわたしのそれぞれ修士論文のテーマでした。博物館を訪れた当時は二人とも 30 歳をだいぶ超えていて、それなのに見た目が若かったので学生料金で入場してしまっただけですが、さまざまな本や印刷物の展示品を見ると、中世ロシア語に取り組んでいた若き日々が鮮やかに蘇ってきます。ああ、この〇〇福音書をカラーで見るとのははじめてだね、この△△聖書は話に聞いていただけの本だよ、この図版はオリジナルなのかな、それとも複製かなと興奮気味に話し合っていたら、われわれの話す固有名詞を耳にした博物館員が、「あなたたち、学生さんにしてはよく知っているわね」。あやうく身分がばれるところでした。

中世ロシア語は 11 世紀から 17 世紀のロシア語を指すので、当然ながらその文献は手書きもあれば印刷もあります。いずれにしても古いものですから、そういう時代の本は 1 冊も持っていません。18 世紀や 19 世紀でも、聖書や聖者伝でしたらほぼ中世ロシア語ということもありますが、それにしたって貴重なものですし、値段だつてとても手が届きません。しかしソビエト崩壊直後の混乱期には、そんなものが売りに出ることもありました。

書籍印刷物博物館を訪れるさらに数年前、カミさんとモスクワを訪れました。結婚したばかりで二人ともまだ 20 代、式は挙げなかったのにお祝い金だけはちゃっかりいただいて、それを全部使って旅行しました。そのときに案内をしてくれたのがゲーセワさんでした。

ゲーセワさんは旧レーニン図書館で働く古い書籍の専門家でした。モスクワも単なる観光名所でしたらわたしにも分

かりますが、こういう専門家に案内していただくと、貴重書が展示してある図書館とか、寺院の中の特別な部屋とか、ふつうは見られないような所を巡ることができます。本当に勉強になりました。

もちろんモスクワ市内もあちこち散策しました。イズマイロボでは市場にも行きました。当時は経済が混乱して、旧国営店では物不足なのに、ここの屋台はどこも豊富な品揃えで、人も詰め寄せ、活気に満ちていました。大半は食料品や衣料品ですから、買いたいものはないのですが、それでも眺めているだけで楽しかったです。

その中に古い本を売っている屋台がありました。台の上には電話帳みたいに大きな本が何冊か並んでいます。表紙は黒ずんでいて題名も分かりませんが、おそらく数百年前の聖書なんでしょう。表紙につけてある値札を見れば、恐ろしく高価なことがわかります。ちょっと手に取ってみたいと思ったのですが、売り子の男性二人はどちらも目つきが鋭く、なんだか怖かったので、わたしもカミさんも遠くで眺めているだけでした。

しかしグーセワさんは違いました。物怖じすることなく屋台に近づき、手前にある本を開きます。やはり聖書のように、古い活字で印刷されているのが見えました。彼女はプロらしく、表紙や奥付などを確認すると、さらに奥にある本を見せるように要求します。はじめのうちは黙って見ていた売り子たちでしたが、何か不安を覚えたのか、お前は一体何者なのかと問い詰めます。彼女はそれを無視して、さらに別の本を見せるように要求し、手帳を取り出してメモを取っています。雰囲気はどんどん陰悪になるのがわかります。ついに男の一人がグーセワさんの見ている本をボタンと閉じて、もう見せてやらないと脅しました。わたしもカミさんは怖くてたまりませんでした。

しかしグーセワさんは違いました。男たちに向かって厳しい顔で、「あなたたちは自分で何を扱っているのかわかってないのよ」と言い捨てると、颯爽とその場を去りました。そして数メートル離れてから、わたしたちにこんなことを話してくれました。

「あそこにあった本はほとんどがクズみたいなものだけど、一冊だけちょっと珍しいものがあったの。いま図書館の予算がどのくらいあるか確認したから、場合によっては買うことにするわ」

えっ、あの目つきの鋭い男たちのところへ再び行くかもしれないのですか！ いやはや、心底敬服しましたね。

あれから 30 年以上が経ちました。数百年前の聖書が買えるほど稼いではいませんが、古い本と言語には相変わらず興味があります。ひとつの言語を本当に勉強する志を立てるなら、古典語に触れないわけにはいきません。上野の写本展で目を凝らしていた人の中にも、ヨーロッパ世界の言語文化を志している人がいたのでしょうか。

<日口交流情報>

鎌倉国際交流フェスティバル (11月10日)

今年も湘南ロシア倶楽部が出店



11月10日、鎌倉大仏(高德院)の境内で鎌倉国際交流フェスティバルが開催されました。鎌倉市内の国際交流団体が活動紹介を兼ねて出店するバザールで、湘南ロシア倶楽部(渡辺雅司理事長)も「ロシア・ミニ骨董市」を出店。各会員が家に眠っているロシアの民芸品や音楽 CD、ロシア語書籍、毛皮帽子やスカーフなどを持ち寄って展示・販売しようということで、JIC もマトリョーシカや絵本、キーホルダーなどの販売で協力しました。

JIC ロシア語留学セミナー (11月23日)

「ロシア語留学の今」をスタッフが報告



「ロシアは今どうなっていますか?」「クレジットカードは使えないんですね?」「ロシア以外にも語学留学できる国は?」…こんな疑問に答えるために、JIC では 11 月 23 日にロシア語留学セミナーを開催しました。参加者は東京の会議室とオンラインを合わせて約 30 名。留学手配と現地ケアにあたっている JIC スタッフが、それぞれ一番ホットな「ロシア語留学の今」を報告しました。(セミナーの詳細は、1 月 15 日発行の本紙第 233 号に掲載します)。